



表紙によせて：大正13年6月10日竣工の瀬田の唐橋で、現在老朽化のため架換え工事が行われている。

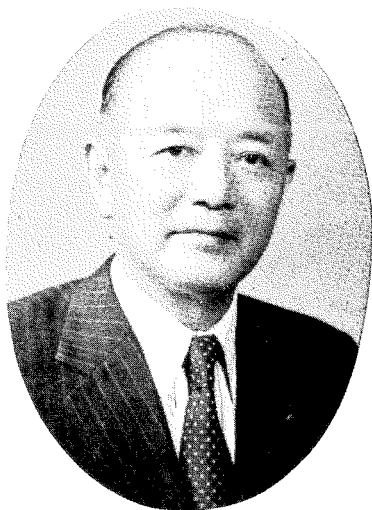
### 1978. 10

ソ連を旅して(雑感)／古墳考現学／  
中世末期の都市建設／瀬田唐橋の歴  
史的変遷／孫悟空の世界を超えて／  
53年度支部役員紹介／53年度支部事  
業計画一覧表

随 想

ソ連を旅して(雑感)

土木学会関西支部 支部長 戸 谷 松 司



本年度土木学会関西支部長の要職をお受けいたしました。兵庫県副知事として用務に追われながら、神戸から大阪へ出かけて行くという時間的、距離的なハンディを乗りこえて、支部発展のため尽力いたしておりますので、皆様方のご協力をお願いします。

この稿を書いているのは8月上旬、ニュースの焦点は日中交渉で、反覇権が反ソを意味しないための歯止めをどうするかに絞られています。このように、何かにつけて世界を考え、語る時、ソ連を無視することはできません。とくに日本にとって、ソ連は“隣国”という以上に、無視できない、避けて通れない大国であります。

私はたまたま、「兵庫県一ハバロフスク地方経済・文化会議(第9回)」、「日ソ知事会議(第8回)」に出席するため昨年7月から8月にかけて3週間ソ連を代表する数都市を歴訪する機会を得ましたので、その印象などを記したいと思います。

ご周知の様に、ソ連はわが国と社会体制が異なる。その社会を語る時、自ずとその国に住む人々の「生きがい」が何であり、どんな「希望」をいただいているかが関心の的になってくる。

たった一度の訪問で、国の基本にもふれるこのテーマに正面から取り組む気は毛頭ないが、私なりの見聞、感想を報告してみたい。とくに、「私有制度」がどうなのか、「自由」はあるのか——この二つをテーマと考えてきたので、あらかじめおことわりして

ソ連の賃金		77年6月	月額
掃除婦		28,000円	
看護婦		32,000円	
教員		72,000円	
市職員		80,000円	
工場労働者		58,400円～	70,000円
医師		56,000円～	80,000円
ジャーナリスト		68,000円～	110,000円
大学教授		128,000円～	
プリマバレリーナ		120,000円～	200,000円
市長		200,000円～	220,000円
大臣		240,000円	
◦平均賃金	140	ルーブル=	56,000円
◦最低賃金	70	ルーブル=	28,000円
(注) 兵庫県下51年世帯主収入			
	月平均	235,000円	

戸 谷 松 司

生年月日 大正10年6月30日  
出生地 兵庫県加古川市  
最終学歴 昭和19年 京都大学工学部卒  
主な職歴 昭和46年 兵庫県企画部長  
昭和47年 兵庫県土木部長  
昭和51年 兵庫県副知事  
現住所 神戸市灘区楠丘町4丁目3番5号

おきたい。私有財産の認否が、社会主義体制・共産主義体制を見分ける第一の尺度といわれる。ソ連でも原則として私有財産制は認められていない。ただ私有が認められているのは、身の回りのわずかなもの、例えば家具、衣服、自動車、ヨットといったたぐい。厳密にいったら生産財、生産手段、流通機構の私有制は廃止されている。

この様に今のソ連では大地主も、大資本家も社会の仕組みの中から自然に生まれなくなっている。ここで参考までにソ連国民の賃金について記しておきたい。彼等の賃金所得は平均月約56,000円程度。別表の様に政府の高官や工場の責任者などは平均よりかなり高い。日本の勤労者の平均月収が約二十万とすると、かなり低い感じがする。

次いで「自由」の問題である。私は少なくとも自由とは行動に「拘束」がない——というだけでなく、生活を完全に生きること、すなわち食物や住居が安定し、かつ精神的にも自由であることでなければならぬと考えている。今回のブレジネフ憲法では「言論」「出版」「集会」の自由の擁護を明記して話題をなげかけたが、社会主義国にも自由はある。しかし私はこれらの自由の権利は、ソ連の社会ならびに国家の利益、および他の市民の権利に損害を与えてはならない——とはっきりことわりがついている自由ではないかと思う。就職の自由、外国旅行の自由もさることながら、ソ連体制に対して反対を表明しても、堂々と生活できる自由でなければ真の自由ではないと信じている。現に、居住、就職において自由は制限されている。また日本では反体制的といわれる共産党の現体制側からの認められ方と、ソ連における反政府主義者の扱われ方は違っている。それでは、一体ソ連国民は、誰のため、または何のために働くのか。その目的は、生きがいは——。

私はソ連訪問が決まった時から、家庭訪問をぜひに——と考えていた。その希望が実現してハバロフスクの労働者の家庭を訪問することができた。訪ねた家庭は、畜産関係工場で働く労働者一家。市内の労働者住宅に住み、夫婦と大学生の長女、来年に大学受験を控えた次女の四人家族だった。部屋は2LDKで、日本の住宅公団のアパートと比較すると各部屋とも大変狭い、大体六割位の広さだろうか。部屋を見渡すと、テレビは白黒とはいえ持っている、家具も新しいのが一応整っている感じである。

ロシア人の楽しみは、友達どうしでお互いに家庭を訪問しあい、二家族、三家族でパーティを開くことだそう。できれば別荘を建てたり、外国旅行をしてみたいとのことだが、結局のところは家具を買い揃えるか、それとも家族と南の暖かい地方への旅行に出かけることで精一杯という。

人々はこうした生活の中に、生きがいを見出ししているのではなからうか。そして何よりも、ソ連国のために働くことに生きがいを感じているのでは——。

以上は訪ソにより得た感懐の一端をのべたもので、三週間で巨大なソ連を知ろうとすることはとうてい無理であるのを充分承知している。今後はソ連に限らず、国際感覚を身につけて、学術のみならず産業、経済の各分野にわたって国際交流を進めて行くことが国土、資源の小さい日本の進むべき道であると信じている。

終わりにあたり支部会員諸賢のご健勝をお祈りします。

## 歴史の散歩

## 古墳考現学

赤井浩一\*

わが国で古墳時代といえ、西暦4世紀頃の前方後円墳に始まり、種々の型式の方墳・円墳の時代を経て、やがて8世紀頃の小規模な群集墳に至り終末を迎える。仁徳陵(5世紀)に代表される巨大な古墳の築造は、当然天皇を頂点とする当時の司祭者や権力者の威力、すなわち大和政権の存在を無視しては論議し得ないが、その築造施工に労働者として従事した一般民衆とは別に、いわば古墳营造技術者として専門の職業を司る工人集団の存在が推定されている。すなわち、土師部(はしべ)がそれであって、彼らは宮廷における葬儀の管掌者であり、さらには土木建築一般の専門職とみなすこともできよう。しかも彼らは他の種類の工芸技術者である陶部・玉造部・鏡作部などと同様に、朝鮮半島から渡来した帰化人とする説が決定的である。日本と朝鮮とのかわりかは4世紀末の半島出征以来連続と続いており、奈良朝仏教文明以前に彼らにより培われてきた工芸技術の温床は、すでに大和・藤原期において十分育っていたのである。

古墳が作られた記紀の時代、日本では文化文明の中心がすでに畿内にあったことは疑いない事実であり、その訳は近畿の中心である大和の地形が初期の稲作農耕にとって最良の環境にあったことによるとされている。すなわち、そこには広い平坦地に小さい水路が自然に形成されており、しかも台風などの災害も九州や四国に比べて少なかったのである。

古墳が初期の巨大な前方後円墳から、末期の小規模なものに推移した過程や理由については種々論議され

ているが、その中で身分官位によって墳墓の制度を定めた大化の薄葬令(646)は重大な意味をもっている(下表参照)。

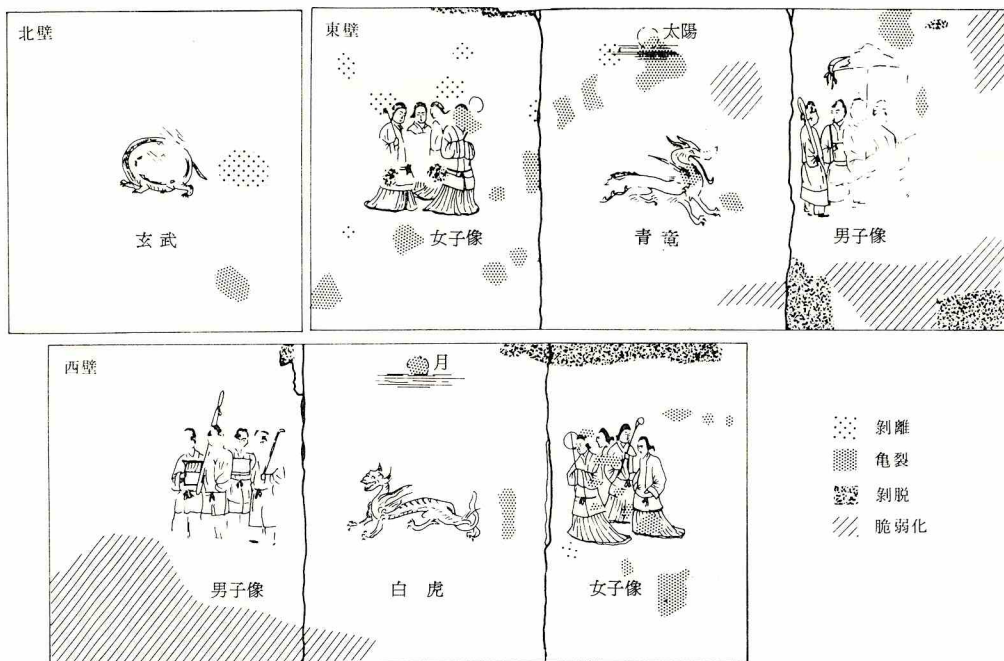
高松塚古墳は円墳で直径約18m、高さ約3mの規模をもち、南向きに開けた天然斜面の中腹に位置していて、降水および地下水の浸入に対して好ましい環境のもとに保護されている(写真参照)。古墳の施工は、板でわくを作ってその中に土を盛り、1層ずつ槌で突き固めてゆく版築とよばれる方法で、ていねいに築造されている。この版築は、古代の寺院建築の柱の基礎固めに多く用いられていた。古墳内の石室は凝灰岩の切石で構成され、奥行約2.6m、幅約1.0m、高さ約1.1mの寸法をもつ。これらの石は約15km離れた大和・河内国境の二上山に産するものと推定され、ほぼ1.5m×1.5m×0.3mの寸法に仕上げ、左右(東西)壁各3枚、天井3.5枚、床3枚、奥と入口各1枚で作られている。



	内部の規模	盛土の規模	延人数	工事日数
王以上	長9尺・幅5尺・高不明	方9尋・高5尋	1,000人	7日
上臣	〃	方7尋・高3尋	500人	5日
下臣	〃	方5尋・高2.5尋	250人	3日
大仁・小仁	長9尺・幅4尺・高4尺	盛土なし	100人	1日
大礼~小智	〃	〃	50人	〃
庶人	地に埋めるのみ		1日も停めるな	

石室の内部は、全面に白壁状の漆喰（しっくい）を塗り込めて、その上に極彩色の日・月・星宿・四神・人物男女像が描かれており、木棺に布を張り漆を塗った棺が埋納されていた。すなわち、北壁には玄武，西壁中央に白虎，その上方に銀で表現した月と雲，左右に男女像，東壁中央には青竜を描いた上方に金で表現した太陽と雲，左右に同じく男女像が描き出されている（下図参照）。南壁には朱雀を描いたと考えられるが，盗掘時の破壊孔や土砂流入による剝落などにより不明である。また，天井には金箔で星を形どり，それらを朱線で結ぶ星座が描かれている。古墳の規模とこのような内容の豪華さからみて，被葬者は多分飛鳥時代に活躍した上臣級の人物と考えるのが妥当であろう。

聞き及ぶところによると，わが国土面積37万 km<sup>2</sup> に対し，指定史跡だけでも約37万箇所あるという。全国平均にして1 km<sup>2</sup> 当り1箇所となるが，古代から近代まで文化的中心であった近畿地方では，実際の密度は全国有数のものとなり，これがこの地方の公共事業の推進に大きい障害となっている。私見では，これらの史跡類をなんでもかでも保存するという悪平等主義を廃し，文化的価値の大小により格づけをして，その取捨選択を早急に実施すべきである。考古学専門家の理解と協力を期待するとともに，われわれ土木技術者は，このような歴史に富む国を民族の将来のために活力ある国として開発し続ける義務を負っていることを忘れてはならない。



東・西・北壁保存状況図

\*京都大学教授・工学博士  
工学部交通土木工学科  
文化庁高松塚古墳応急保存対策調査会委員


 歴史の散歩

## 中世末期の都市建設

西川幸治\*

人類はそのながい歴史のなかで、土木技術を駆使して生産の適地を拡大して生産性をたかめ、生活の空間を拡大して居住性をたかめてきた。土木技術は生活環境の向上をねがう人びとのつよい信頼にこたえ、その期待のもとで有効性を発揮してきたのである。

古代に大陸の先進技術をうけいれて建設された都城は、政治中心としてその権威を示した都市で、庶民の生活への配慮はとぼしく、その生活はきびしかった。人びとはあいつぐ火災や鴨川の氾濫、地震、そして度かさなる戦火でその生活をさいなまれていた。そこで底辺に生き苦しむ人びとの救済をねがって、各地を遊化して池を掘り堤を築き、道をひらき橋をかける聖・行基や空也などもあらわれた。中世末期には、都市的規模をもつ民衆救済の建設土木事業があらわれてきた。

### 中世末期の都市の動き

中世末期には、生活の全面にわたって疾風怒濤ともよぶべきはげしい動きがくりひろげられた。都市の動きにも、戦国動乱の世を生きぬくために、町衆たちの間に自衛と自治をめざした町づくりがすすめられ、わが国の自由都市の萌芽ともいうべき新しい町が各地にあらわれたのである。いっぽう、戦国武将の間では城下をめぐる攻防と経営の動きが各地ですすめられ、やがて城下町の形成へつながっていった。この二つの町づくりがたがいに対抗し葛藤して、中世末の動乱の世は近世へと展開をとげたのである。ここでは、町衆の町づくりの一つ・寺内町の動きを中心に中世末期の町づくりをみてみたい。

寺内町とは浄土真宗の寺院を中核とし、宗教的連帯感によって支えられ、その精神共同体を確保し、その生活共同体を維持していくために計画的に構築された環濠城塞都市である。厳密にいえば、1471(文明3)

年の吉崎建設から1580(天正8)年の石山戦争による壊滅までのわずか110年の歴史しかもたない都市なのである。もっとも、吉崎建設以前にも、近江の堅田(大津市)などでは寺内町をめざしての模索の動きはみられた。堅田では殿原衆(地侍)と新しい市民層ともいうべき全人衆まとうどしゆが、それぞれ独自の文化を形づくり、堀をめぐるして要塞とし、互いに協力し共同して外敵にあたり自治的運営に力をつくし、内陸の自由都市ともよぶべき気風をみなぎらせていた。1645(寛正6)年、東山大谷の坊舎を破却された蓮如は難を堅田と湖東の金森・赤野井に避け、布教活動をつづけるなかで、その生活経験を寺内町の建設にいかそうとしていた。

### 寺内町の建設

1473(文明5)年、近江から越前吉崎へ進出した蓮如は、ここに寺内町の原型を築いた。吉崎は越前と加賀の国境にあり、山を背に北潟湖から日本海へ通じていた。この交通の要地に「年来虎狼のすみなれしこの山中をひらきたいらげて」「柴築地をつきなんどして」「あたかも大國の城郭の如く美々しき靈場」といわれる寺内町を築いた。この吉崎寺内町には、加賀・越中・越前の三国で当時の社会の底辺に生き、きびしい生活をしいられてきた民衆が真宗教団に帰依し門徒となり、吉崎に多屋を築いてその防衛のために集まってきた。彼らは多屋衆と称し、おそいくる外敵にたいし、「仏法のためには一身惜しむべからず、合戦すべき」と決意し、はげしく抵抗した。

やがて1475(文明7)年には畿内へ進出し、寺内町の建設をすすめた。たとえば、「後ニハ淀川ミナギリテ、船ノ通路自由ニシテ、シカモ要害ノ便ヨロシキ」河内国出口(枚方市)に「方二町バカリノ淵アリ、コレヨキ地ナリト則ワチ淵ヲ埋メ平地トシテ」光善寺を

中心に寺内町を建設した。1478 (文明10) 年には、京都に近く東海道の接した山科の地に「針の木原の林四五町ばかりの平地」の寄進をうけ、本願寺を再建し「四方の堀、橋、土手の並樹」をそなえた環濠城塞都市を築いた。山科寺内町には第一郭の本願寺を中心に、一家衆や他屋役をつとめるために在所をはなれて山科に滞留する「山科在京の衆」が住まう第二郭内寺内、これと土居や濠をへだてた外側に町衆たちが住む第三郭外寺内からなっていた。当時の山科寺内町の繁栄ぶりがある京都の貴族は、「寺中は広大無辺、荘厳ただ仏国の如し、在家また洛中と異ならず、居住の者おのおの富貴にして、すなわち家々のたしなみ随分美麗なり」と示している。

また、河内の牧郷招提 (枚方市) は、「荒蕪ノ地ニシテ、今ニ無主ノ荒原ナリ」という地であったし、河内富田林も「往古荒芝地にて」と不毛の荒地であった。そして、あの河内長島 (桑名市) も「濃州より流れ出る川あまたあり、……大河となつて長島の東北西五里三里の内、幾重なくひきまわし」と記されているように、低湿地に治水と要害化をはかった典型的な輪中集落であり、石山戦争では環濠城塞都市として果敢なたたかひを示した。この石山戦争にあたり、本願寺教団の中心として各地の寺内町と連繋して信長の軍に10年にわたって抵抗した石山寺内町は1496 (明応5) 年、摂津の大坂に「虎狼ノスミカナリ、家ノ一モナク鳥ハカリナリシ所」に「町の番屋、櫓、橋、堀、くぎぬき (町口の木戸)」を設けて環濠城塞都市としての機能をかためていた。

このように、寺内町はこれまで人びとの生活の適地とみなされていなかった荒地、湿地、谷口などに本願寺教団のもつ「城作り」=「町づくり」の技術、当時の先進的土木技術を駆使して開発をすすめ、当時の社会の底辺に生き、放浪してなやみつづけた人びとに安定した生活の場を提供し、戦国乱世を生きぬくために

環濠城塞化して自衛の姿勢を示していたのである。寺内町では自治への関心も生活環境の防衛の意識からたかまっていた。彼ら本願寺教団の門徒たちはたがいに同期、同行とよびかわし、世俗の権力がその所領をめぐって抗争をつづける戦国の世に、世俗的手段・武力的抗争によらず宗教的連帯感で結ばれた精神的共同体をめざし、仏法がすべてを支配し、人びとは仏法によって保護され処罰されるもするという世界・仏法領の出現をねがったのである。そして本願寺の所在する山科や石山を「上洛」し「在京」すべき中央寺内町と意識し、危急の際には長島でみられたように、「男は退くべからずの誓いをたて、女は歎くべからずの誓いをたて、弥陀の本願に入心し、さらに命を失うを悲しまず、征伐を恐れず」という姿勢を示した。

### 中世末期の理想都市

寺内町の動きは、けっして孤立した特異なものではなかった。中世末期の京都でも、堺でも、その他各地の町でも、活発な町衆の町づくりがみられたのである。町を環濠城塞化して外敵から自衛する姿勢を示し、内には自治的運営をはかり、都市の安全と平和の維持に力をつくし、またその信条の相異をこえて過去世や来世に理想を見いだしたり求めたりするのでなく、この現実世界に彼らがねがう理想の都市を実現しようとし、その現実の生活を高らかに謳歌しようとする積極的な意欲が共通してみられた。注目すべきは、生活環境の安全と向上をねがう人びとのつよい期待にこたえて、当時の先進的土木技術が人びとの救済をめざして有効に駆使されていることである。

\*京都大学教授・工学博士  
工学部建築学第二工学科

## 歴史の散歩

## 瀬田唐橋の歴史の変遷

山本 祐 親\*

私は生まれつきの歴史好きで、県職員を勤めていた三十年余の間に県史や郡誌を読みあさり、その中から特に瀬田唐橋について興味を持ちはじめた。これは、私が唐橋の近くで生まれ、育ったからであろうと思われる。

瀬田唐橋については、過去に「瀬田の夕照」と題し、支部だより (NO. 8) に掲載されているが、ここでは若干角度を変えて橋の歴史を述べることにしたい。

まず地名であるが、日本書紀には「瀬田」とあり、日本統記には「勢多」とある。さらに、円満院文書の中世以降のものには「勢多」、 「勢田」を混用している。現在は「瀬田」である。したがって橋名についても、古代から明治中期までは「勢多橋」または「勢田橋」と書いたものが多い。現在の「瀬田橋」に定着したのは明治22年町村制が施行された時、川の東岸を瀬田村と名づけたので、明治27年の架換えにあたり擬宝珠に「瀬田橋」と彫刻し、爾来「瀬田橋」に定まったのである。

瀬田橋は古来軍事上の要害地であるとともに、都と東国をつなぐ交通上すこぶる重要な橋であった。戦国時代武田信玄が上洛して天下に号令せんと野望もむなしく信州駒場で陣没する際、「瀬田の唐橋」にわが旗をたてよ、と遺言したのは有名な話で、上洛を果たすには近江を制圧せねばならず、近江を制圧することは瀬田の唐橋を手中におさめることにも通じた。織田信長は天正3年(1575)橋長180間(約350m)、橋幅4間(約7m)の一本橋の大橋を、わずか90日間の突貫工事で架けさせた。この架橋の奉行には瀬田城主山岡美作守景隆を命じ、木村次郎左衛門もこれに協力した。この時の架橋位置は瀬田城(現臨江港)の真西で現在よりも約200m下流で、したがって現橋のように大橋、小橋をつなぐ中之島もなく東西の一本橋であったのではないと思われる。これは、現在架設されている橋長が、大橋、小橋および中之島を加えてもわずかに250m前後にしかならないことから明白で

ある。したがって瀬田橋という本格的な橋梁は信長によって初めてできたのである。

つづく天正11年には豊臣秀吉がこの一本橋を修理完成しているが、推測であるが、その後信長の架けた一本橋を中之島を利用して大小二つの橋に変え、現在位置に架橋されたという。ただしこの架橋年代は不明であるが多分文禄年間であろうとされている。

瀬田橋の架換えは確かな文献の記録によれば、織田信長の架換えの天正3年以来文久元年までに橋の長さなどには短縮もあり延べ16回程度行われ、さらに廃藩後は明治8年、同28年、大正13年と3回の架換えが実施されている。

瀬田橋の構造は第12代景行天皇の時代に「筏を組み瀬田に船橋を掛る云々…」とあり、初めは恐らく船橋のようなものを架設されたものといわれている。その後壬申の乱(672)に將軍智尊瀬田橋奮戦の篠に「橋中の橋板3丈余(約3m)を取りはずして一枚の長い板をかけて綱をつけその板を踏み渡る敵に綱を引いて川に落した。」といわれている。しかし、橋としての現代的な構造形態の現われは、前述の天正3年(1575)の架橋が初めてである。それまでは双橋か、あるいは単橋かいずれかが架橋されたことは史籍によって明らかである。

その後、寛政5年(1793)8月に勢田橋掛替普請完成、続く文化元年(1804)4月に勢多橋が修理完成している。形態は反り橋で勾配は8分の1(12.5%)に造られており、これは、古代より名橋莊嚴を表現したものと考えられる。橋脚の建込みは3本建て、杭径は54cm程度の巨丸太、その間隔は大橋のみ中央は5間(9m)、ほかは4間(7.3m)、脚数は22であった。反り橋のため、参勤諸大名の道中行列の際、供先の鎗が勢田側の橋詰にさしかかる時、石山側から見えなかったという。このため橋の中央まで行列を進め対交して慌てて行列の節度を守ったものとうかがうことができる。

さらに、万延2年(1861)4月に勢多橋普請が完成したと、現在保存されている擬宝珠に彫刻が残っている。この時代には寛政5年の架換え普請のときに構造形態が変わっている。橋脚の建込みは3本、杭径54cm、間隔は大橋のみ中央が5間と以前と変わっていないが、他の間隔が3間(約5m)、脚数が31本で、脚の外側はやや斜めに建込んでおり、当時の架橋技術者としては相当研究したものとうかがわれる。

明治8年(1875)12月には、明治政府初めての架換え工事が行われている。これは政府の直轄施行で、工事担当は内務省大阪土木寮分局で、架設用材は延暦寺官山のものが用いられた。この時は、架換えのための仮橋を作らず、渡船で交通に支障ないように努めた。橋長は大橋97間4分(174.6m)、小橋7間6分(48.6m)、工事精算額1万189円66銭5厘、渡船賃2,121円66銭5厘と記録されている。なお、明治6年8月、河港道路修築規則が定められ、橋梁構造規格によって、橋脚を5本建込みとし、橋脚間隔も一気に広げ従来の2倍近い9mで施工している。

つづいて明治28年3月にも勢多橋が竣工の記録がある。この工事は滋賀県の手で施行したこと、工事費は全額県費で予算化されたもので、当時としては未曾有の出来事で県会においては異常な空気に包まれ…と伝えられている。出来るだけ予算節減を計るため、仮橋工事を取りやめ渡船受請経費3,653円97銭で実施されている。本橋工事は大橋100間(180m)、小橋30間(54m)、幅員はいずれも4間(7.3m)、橋脚杭は5本建込み配列で、大橋19組、小橋5組、橋脚間隔はいずれも9m、上下貫仕拵と筋違貫などを施工しており、総工費は3万160円59銭6厘である。なお、橋杭の尖端部に初めて、鉄製沓をはめており、この構造は厚さ8mmの鉄板を三角帽子型に造り、重ね継目には鉄鉋



で9か所かしめている。また、沓の高さは50cm前後で橋杭との打込み孔は合わせて11か所、打込みは犬釘(1cm角、長さ10cm)である。橋脚杭の径は末口30cm、元口は50cmとなっている。鉄沓については2種類あり(写真参照)、鉄鉋打ちのものは、比較的水深のある箇所中央部より瀬田寄りに打込まれてあり、もう一つは鋳物製で鉋なしの形状(高さ40cm、径20cm前後、厚さ8mm)で陸地寄りに打込んで施工されている。これは工事中の床堀箇所から発見され調査したものであるが、何しろ昭和50年12月の着工当時からもっと調査しておれば、明治28年架橋の状態を確実につかむことができたろうに誠に残念でならない。

その後、本橋は大正13年に本号表紙のような姿で架換えられて、最近まで近江路を彩っていたが、この橋も老朽化が激しくなり、昭和50年より何回目かの架換え工事が行われている。昭和54年4月には新しい瀬田唐橋が、この由緒ある橋の歴史の一ページに書き加えられ、以前にも増して人々に親しまれる「瀬田の唐橋」となることを期待してやまない。

## 土木の視界

## 孫悟空の世界を超えて

高野 浩二

昔、巨岩から生まれ出た孫悟空は、長い修業の後に、不老の法、変化の術を会得し、多くの猿どもを集めて下界をしたがえ、さらに天上を騒がすようになった。どのようにしても退治することができないこの乱暴者をもてあました天帝は、仏さまに救援を依頼した。

釈迦如来は、早速、天上で暴れていた悟空に会い、問答のうえ賭けをすることにした。もし腕まえがあって釈迦の手のひらから外へ飛び出すことができたなら悟空の勝ち、天宮を譲り渡す。もし飛び出せなかったら、悟空は、下界にもどり、さらに何劫かの長い苦行を積みねばならない。悟空はひと飛び十万八千里の筋斗雲に乗り、飛びに飛んだ。そして、この世の果てと思われるところにあった五本の柱の中央の柱に、「齊天大聖ここに到る」と書きしるし、もどって如来に対し、自分の勝利をつげた。しかし、如来が示したその手の中に、「齊天大聖云々」の文字があり、この賭けは悟空の完負となった。”

西遊記の一節、この物語りは、要するに、手のひらの大きさを、たんに物理的にしか理解できなかった孫悟空が、仏教哲学の廣大無辺の中からは、ついに飛び出せなかった、ということの意味するのであろう。

近年の社会はたしかに複雑になった。すこし前“価値観の変化”という言葉がよく使用され、大衆の欲求が高度化したことを表現した。そしてそれは、最も代表的な例として、経済成長よりも環境保全を求める傾向となってあらわれ、年月を経過してきた。しかし、最近では、社会情勢の変化もあって、たんに部分的な環境質の悪化のみを論ずるにとどまることなく、環境というものをさらに広義に解釈し、生活環境に加えて、

経済環境、公共環境といった範囲を含め、総合的環境についての評価を論ずる方向に進みつつあるように考えられる。

このような社会の価値観の変化に適切に対応してゆく方策として、これまたよく唱えられた言葉が“発想の転換”である。既存の概念をまずはなれ、まったく別の視点、原点に立って、事象を考察することは、その対象をより正しく理解し、問題をより適切に解決するために不可欠な手法の一つである。しかしながら、その“発想の転換”は誰にでもできるだろうか、勿論、可能である。ただし、その人、各人の素養の範囲によって、転換可能限界、というものの大小があるのは当然である。前記、西遊記の一節は、いわば、お釈迦さまと孫悟空との発想限界の大きさを表現しているものである。

社会の欲求の急激な複雑化に応じて、土木工学グループは大いなる発展を遂げた。20年前の土木工学の範囲に、経済、環境、文化、等の一部を加え、なお成長を続けている。より広範囲な素養と、その上に立った深い専門的知識、それが、明日の土木技術者に対して求められるものである。しかしてその基盤となる素養の拡大、蓄積のためには、いかなる方法にも増して、常に探求、研究の心を維持する積極的な生活態度というものが有効である、と私は信じている。

明日の土木技術者は、この力によって、はげしく変動する社会の欲求の方向を見定め、これに適切に対応して行かねばならない。すくなくとも、前記西遊記の一部にある孫悟空の立場ではなく、いくらかでもお釈迦様に近い立場で、この社会の動きに対処して行きたいものである。

# 広 報

## ASCE 旅行団来日

ASCE (アメリカ土木学会) 旅行団一行82名が来日、2班に分かれて、次のように関西地区の土木諸施設を見学し、交歓会がもたれました。

日時 第1班 昭和53年6月2日(金)

第2班 昭和53年6月12日(月)

見学先 六甲大橋、新神戸トンネル、  
大阪府村野浄水場

当日、資料提供、現地説明等お世話になった方々に厚くお礼申し上げます。



(写真説明；六甲大橋を見学中の ASCE 旅行団)

## 昭和53年度支部役員紹介

支 部 長 戸 谷 松 司 (兵 庫 県)

副支部長 佐 藤 康 (大鉄工業)

商 議 員

足立紀尚(京大)

岩本博(和歌山県)

片平洋(新日本技術)

川口大仁(大阪市)

清水士朗(大阪市)

芹生正巳(大阪産大)

大同淳之(立命館大)

手島聖二(日建設計)

仁枝保(阪工大)

長谷川進(横河橋梁)

藤井学(神戸大)

松橋数保(阪神公団)

宮村善保(近畿地建)

渡辺敦(近鉄)

評 議 員

足立力(大林組)

影沢清光(鉄建公団)

小寺稔(大阪市)

鮫島泰佑(三港建)

畠昭治郎(京大)

三笠正人(阪市大)

笈源亮(神戸大)

幹 事 長

岩佐義朗(京大)

幹 事

森下繁(兵庫県)

高田巖(阪工大)

井田憲治(神戸市)

小田一紀(阪市大)

児島孝之(立命館大)

中田修三(建設技研)

林正(阪大)

松本勝(京大)

前田幸雄(阪大)

井上準治(京都市)

岡田純佳(竹中土木)

加藤象男(間組)

小林昭一(京大)

下口満喜衛(大成建設)

園田恵一郎(阪市大)

竹中敏正(道路公団)

永井重光(京都府)

西尾重明(佐藤工業)

林正(阪大)

松井克好(兵庫県)

松山巖(大阪府)

森西勤(国鉄)

家原俊二(近畿地建)

河野三千世(中央復建)

小簀泰明(大林組)

千田実(関電)

浜田俊郎(近鉄)

毛利正光(阪大)

山本敏郎(阪神公団)

今井功(日立造船)

小沢吉彦(三港建)

鎌倉博(奈良県)

佐野幹夫(福井県)

関川佳生(フジタ工業)

大長昭雄(関電)

津郷勇(福井高専)

成田康夫(ビソ・エース)

西沢寛(阪神電鉄)

林正雄(国鉄)

松浦勢一(神戸市)

宮川稔(滋賀県)

吉宗一哉(住宅公団)

池上輝夫(酒井鉄工)

川本正身(近大)

笹山幸俊(神戸市)

戸谷松司(兵庫県)

日永善雄(鹿島建設)

矢嶋哲男(大阪府)

総務担当主査

藤井俊朗(近畿地建)

会計担当主査

企画担当主査

河井章好(阪神公団)

編集担当主査

井上矩之(京大)

今宿芳弘(鴻池組)

軽部大蔵(神戸大)

北井克彦(大阪府)

田宮芳彦(大林組)

鳥居興彦(国鉄)

中村浩志(駒井鉄工)

西岡和彦(阪急電鉄)

堀田宣道(道路公団)

松村博(大阪市)

本浩司(三港建)

安福滋(関電)

# 昭和53年度支部事業計画一覧表

	53年			54年
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
講演会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ヤン教授講演会* 4/14</li> <li>●工業教育特別講演会* 4/17</li> <li>●年次学術講演会 5/4</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●コーン教授講演会* 7/1</li> <li>●業務研究発表会* 8/29</li> <li>●高専学生対象講演会 9/13</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●廃棄物問題講演会 11/22</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●技術革新講演会 1/17</li> <li>●施工技術報告会* 1/26</li> <li>○奈良地方講演会*</li> <li>○パークモア博士特別講演会*</li> </ul>
講習会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●有限要素法* 6/5, 6 6/12, 13</li> <li>●破壊力学* 6/20, 21</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●土質工学における化学の基礎と応用* 7/14</li> <li>●臨海埋立地盤 7/28</li> <li>●RC構造の再検討* 9/12, 13</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●汚泥の処理と処分の最近の諸問題 11/8</li> <li>●沿岸の開発・保全と環境アセスメント 11/24</li> <li>●石灰安定処理工法* 11/24</li> <li>●コンクリート構造物の設計と施工* 11/27, 28</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●舗装に関する最近の問題と新しい技術 2/2</li> </ul>
研修会			<ul style="list-style-type: none"> <li>●構造物の自動設計 11/14, 15</li> </ul>	
研究・懇話会			<ul style="list-style-type: none"> <li>●都市の耐震防災 10/27</li> </ul>	
見学会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第1回見学会(大鳴門橋)*5/12</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>○第2回見学会(浮上式鉄道実験センター)</li> </ul>
映画会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●一般映画会 5/4</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●学生映画会 11/4～24</li> </ul>	
懇親会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●総会懇親会 5/10</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>●会員懇親会 1/17</li> <li>○支部懇話会</li> </ul>
シンポジウム 座談会			<ul style="list-style-type: none"> <li>●工事現場の安全対策 12/12</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○座談会</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>●役員選挙 4/7</li> <li>●総会 5/10</li> <li>●本部総会 5/30</li> <li>●ASCE見学・交歓会 6/2, 12</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●支部だより13号発刊 10/1</li> <li>●全国大会 9/19, 20, 21</li> <li>●学校班・班長会議 9/25</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●関西の土木工事概要78年度版発刊 12/1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●支部だより14号発刊 4/1</li> </ul>

1. 年間の事業計画として、すでに実施済みのものも掲載した。
2. 表には項目だけを掲げた。詳細決定次第、行事案内または会誌により案内する。
3. \*印は共催、協賛を表わす。
4. ○印は現在未確定のもの。
5. 事業計画についてのご意見、ご希望は、支部幹事または事務局にお申し出下さい。